

NEWSLETTER



The James Joyce Society of Japan, April 2016

Topics

1. 第28回研究大会について
 - (1) 研究発表要旨
 - (2) ワークショップ要旨
 - (3) シンポジウム要旨
 - (4) 大会日程と会場・懇親会会場
2. ダブリン便り（平繁佳織）
3. 協会HPのリニューアル
4. 2016-17年度常任委員選挙結果について
5. 会費・懇親会費のお振込み

事務局連絡先

日本ジェイムズ・ジョイス協会
事務局 〒420-0911
静岡市葵区瀬名1-22-1
常葉大学 外国語学部英米語学科
戸田勉研究室内

（住所変更をされ、このNewsletterが転送で届いた方は、お手数ですが上記事務局宛までその旨お知らせください。e-mail可）

メールアドレス

joyceanjapan(at)gmail.com

[(at) を @ にして下さい。]

協会ホームページURL

<http://joycesocietyjapan.jimdo.com/>

* 現在上記の暫定URLの使用しております。詳細につきましては本紙の3.を読み下さい。



(Howth Lighthouseに向かう突堤：撮影／南谷奉良)

第28回研究大会のご案内

2016年6月11日（土）に第28回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会が開催されます。大会会場は法政大学市ヶ谷キャンパスとなります。懇親会会場に1カ月前に出席人数を連絡する必要があるため、大変お手数ですが、同封した出欠確認のハガキを5月25日までに投函して下さいますようお願い申し上げます。

日程：2016年6月11日（土）
会場：法政大学・市ヶ谷キャンパス S 406（外濠校舎）
懇親会会場：教職員食堂（55年館2F）

今回のNewsletterには研究発表要旨・シンポジウム梗概に加え、Universtiy College Dublinに留学中の平繁佳織さんからのダブリン便りが届いております。また、協会ホームページのURLがしばらくの間変更になりますので、合わせてご確認ください（ホームページではNewsletterのカラー版がダウンロードできます）。

1. 第28回研究大会について-----	p.2-6
(1) 研究発表要旨-----	p.2-3
(2) ワークショップ要旨-----	p.4
(3) シンポジウム要旨-----	p.4-5
(4) 大会日程と会場・懇親会会場-----	p.6
2. ダブリン便り（平繁佳織）-----	p.7-8
3. 協会HPのリニューアル-----	p.8
4. 2016-17年度常任委員選挙結果について-----	p.8
5. 会費・懇親会費のお振込み-----	p.8

(1) 研究発表要旨

図書館長の軽快なステップ——『ユリシーズ』第9挿話と『茶書』

東郷 登志子

William M. Schutteは *Joyce and Shakespeare* で、第9挿話の図書館場面における館長Thomas Lysterの発言は、ジョイスが彼の知的資質で読者を感動させようと明らかに意図したものでないと記している (34)。だが、果たしてそうだろうか。

Schutteの指摘通り、館長はスティーヴンを中心とするシェイクスピア談義には加わらず、出入りのために数回登場するだけである。だが、彼の推測に反して、館長の言動はこの挿話の主題をなすハムレット論の由来について、いわば、シェイクスピア談義の案内役として、秘密の扉を開ける役割を果たしていると考えられる。

本発表では、「発見の入り口」となる秘密の扉が、岡倉覚三の *The Book of Tea* に通じているという仮説のもとに、内在的批評によってそれを証明したい。

岡倉は、利休の気合いのこもった辞世の偈と、死を迎える時の様子を脚色し、悟りを得た禅僧が「顔に微笑を浮かべて軽い足取りで未知の世界へ旅立つ」雄姿に描いている。英語の「死去する」を通常の“pass away”ではなく、前向きに“pass forth”と表現した岡倉の破格な手法を踏襲したジョイスは、キリストの復活やソクラテスを暗示することで「死」を肯定的に描写している *The Book of Tea* の巻末をパロディ化し、勤勉な館長にしては場違いなまでの踊りのステップに転換することで、ユーモラスに描いたと解釈できる。

ジョイスはAEことラッセルの口を通して「理念」や「永遠の知恵」がプラトンのイデアの世界に通じると言い、*The Book of Tea* のキー・ワード“smile”を浮かべた彼に向かってエグリントンに「形のない精神の本質”formless spiritual essences”と反復させ、議論を展開する。一方、岡倉は利休最後の茶会描写にHamletからホレイショの言葉を引用して茶室に通じる路地を「亡霊のつぶやきが聞こえる」と脚色し、凶事の前兆を暗示して“homeless ghosts”を用いていた。ジョイスは、「音」(formless/homeless)と「意味」(ghosts/spiritual essences)を掛けた語呂合わせで *The Book of Tea* をほのめかせていたのである。上例の他に *The Book of Tea* 第七章に埋め込まれているゲーテやミルトンの引喩も可視化し、Hamletのテーマである「心の眼」に映った岡倉の芸術的手腕を大胆なひねりで再現し、独自の文学談義を展開している。

スティーヴンのハムレット論における結論は、寓話的に難局を回避する方法が言外に示唆されているのみだが、ジョイスは、プラトンとアリストテレスが統合された *The Book of Tea* の第七章をユーモラスに反転し、ミメシスすることで、Marilyn Frenchも指摘する「父」から「子」へ「使徒伝承される神秘的な」境地として、芸術的創造の根幹ともいえる核心に到達したことを示している。

レオポルド・ブルームと書記メディア

今関裕太

タイプライターやグラモフォンといった言語の処理・保存のためのメディアは、19世紀の後半に開発されはじめた。『ユリシーズ』にもこうした書記道具は頻繁に登場し、様々な人物によって使用されるが、中でもレオポルド・ブルームは、これらのメディアと頻繁に、そして些か特徴的な仕方に関わりを持つ。「ハデス」においてディグナムの葬儀に参列するブルームは死者の声をグラモフォンによって保存することを思いつくが、彼が想像する録音・再生された音声は、頻繁な語句の反復とノイズを含んだ不明瞭なものである。また「食蓮人たち」において彼は、文通相手のマーサから送られてきたタイプライターで書かれた手紙を読み、「セイレン」で返事を書くが、彼はマーサの紋切り型の表現やタイプミスを面白がる一方で、彼女が実際にはどのような人物であるのか詳しく知ることを避けている様子である。このようにブルームは、書記メディアによって記録された言葉から話し手・書き手の現前性や個性をしばしば排除し、言語の反復可能性・機械性に興味を惹かれている。

本発表では、こうしたブルームと書記メディアの関わりについて、人体を機械と同一視した19世紀から20世紀初頭にかけての機械的身体観の歴史を整理したうえで考察する。産業革命の波及とともに、西欧世界は人間を外部から取り込んだエネルギーを変換して活動する機械とみなし、啓蒙主義時代のように特権的な動力源として魂や精神を措定することは少なくなっていた。人体の機械的延長として発明されたタイプライターやグラモフォンといった補綴技術は、精神や理性の表れと捉えられていた人間の声や書記の複製可能性を暴露することで、こうした唯物論的な人間観を強化したといえる。芸術家として自らの精神の独創性について思い悩むスティーヴン・ディーダラスとは対照的に、しばしば人体を機械に、また食物を燃料に見立てるブルームは、魂や理性について考えることをほとんどせず、したがって言語をその使用者の精神の表れと考えることもないのである。

Joyce, the War of Independence, and the Military Archives

Brian Fox

‘I want’, Joyce reportedly told Frank Budgen, ‘to give a picture of Dublin so complete that if the city one day suddenly disappeared from the earth it could be reconstructed out of my book’. The recent digitization of a number of Irish archival records has opened up a wealth of primary source material for scholars worldwide looking to test Joyce’s claim about rebuilding a lost Dublin from *Ulysses*. Yet these rich resources have remained for the most part untapped. There is much of significance to be learned about Joyce’s Dublin from records including the National Census reports of 1901 and 1911; the Dublin City Electoral Lists database for the years 1908-15; the NLI’s Catholic Parish Registers; and—the particular resource I will be focusing on—the Bureau of Military History Collection, 1913-1921 (BMH), which includes some 1,773 witness statements that were collected by the State between 1947 and 1957, in order to gather primary source material for the revolutionary period in Ireland from 1913 to 1921. The statements come from well-known figures and ordinary volunteers, and the recollections they include often concern events before and after the 1913-1921 timeframe (this paper will concentrate on the years before 1913). The somewhat tortured history of the gathering, preservation, and eventual release (made available online in 2012) of the BMH collection in part reflects Civil War divisions and the politics of the 1940s/50s, and by extension evokes the central problems concerning the commemoration and memory of this revolutionary period in Ireland.

The archives undoubtedly offer rich pickings for the eager annotator, but this paper will focus rather on testimonies describing the wider social, political and cultural context of the period, and will discuss how this can enrich our understanding of Joyce’s Dublin. It will focus first on those instances where Joyce himself is mentioned in the archive. For example, Joyce is reported to have been a visitor at Cathal McGarvey’s tobacco shop, ‘An Stad’, a popular meeting place for nationalist and cultural movements in the late nineteenth and early twentieth centuries. Using those instances as a platform, this paper will expand the focus to develop certain specific lines of connection through the Military Archives between the history, culture and politics of Ireland circa 1898-1904 and Joyce’s works. It will then discuss the ways in which the collective memory of the War of Independence as encoded in the archive can be applied to Joyce’s own encoded memory of Irish history in his fiction.

(2) ワークショップ要旨 「ジョイスとWaterlooとフランス革命」

(司会・兼講師) 清水重夫

(講師) 清水重夫・鈴木英之・吉川信

FW I-1のmuseyroomのシーンはPhoenix ParkのWellington monumentの下にある博物館として、パリのInvalidを思い起こさせる建物です。パブの召使Kateが案内人として、Waterlooの戦いに関する説明となります。

Waterlooの戦いは1789年のフランス革命の終末として、ナポレオンの敗戦となります。

フランス革命はヨーロッパ大陸での歴史において様々な大きな意味を持つ大事件です。アイルランドとの関係でも、1798年のUnited Irishmenの蜂起のWolfe Toneに大きな影響を与えたこと、ナポレオンと対峙し、勝利したWellingtonはイギリス軍の総帥ですが、アイルランドの出身で、monumentを始め、道路の名前にもその名を残しています。

また、フランス革命を主題とした小説に、『レ・ミゼラブル』（ユーゴー）、『虚栄の市』（サッカレイ）、『戦争と平和』（トルストイ）などがあります。ジョイスにとってこれらの作品を含めて、フランス革命の持つ意味を考察しようと考えています。

1. (鈴木) FWI-1 p.8-9...p.9-23 museyroomの場面の解釈
2. (清水) WellingtonとアイルランドとWaterloo
3. (吉川) ジョイスとフランス革命とアイルランド

(3) シンポジウム要旨 *A Portrait of the Artist as a Young Man* — 自伝と虚構(フィクション)の間

(司会・兼講師) 高橋渡

(講師) 河原真也、田多良俊樹、田中恵理、道木一弘

『肖像』は自伝的ビルドゥングスロマンとして読みうるのか？確かに『肖像』には、ジョイス自身の伝記的事実、或いは、彼が育ったアイルランドの歴史的事実が反映されている。しかし、それは何処まで伝記的・歴史的な記述なのか？或いは、フィクションとしての小説の素材に過ぎないのか？また、著者ジョイスと彼の分身たるスティーヴン・デダラスとの距離はどの程度あるのか？例えば、Kennerの“The Portrait in Perspective”や、Wayne Boothの“The Problem of Distance in *A Portrait of the Artist*”ではこのような問題が直接論じられているが、たとえ直接的に論じない場合でも、『肖像』について論ずる際には、この問題を考慮に入れざるを得ないだろう。このシンポジウムでは、講師がそれぞれの観点からこの問題について考察し、ディスカッションすることを通して、『肖像』がどの程度まで自伝であり、どの程度まで虚構なのかという問題について、そして更に自伝的小説という特異なテキストの本質について、一定の示唆を提起出来ればよいと考えている。

『肖像』における“peasant”表象について— 事実と虚構とのずれから探るジョイスの歴史認識

河原 真也

19世紀末の文芸復興期に活躍した作家たちは、アイルランドの「西部」や「農村」といったものに重きを置き、作品の中にさまざまな形で“peasant”を登場させた。しかしながら、彼らの描く“peasant”像は多種多様であり、階級や宗派によっても農村に対する認識が異なっていたと言えよう。『肖像』ではナショナリズムやアイルランドの土着性と結びつく“peasant”が描き出されているが、シングやイエイツらの描くものには純粋、無垢といったイメージが付与されている。

本発表では、19世紀半ば以降変容しつつあった農村社会の実態を検証したうえで、『肖像』において描写される“peasant”と、文芸復興期の作家が描く“peasant”とを比較・検証する。それを踏まえて、歴史的事実とフィクションのずれがジョイスの歴史認識にどのように反映しているのか、一考察を加えてみたい。

Portrait におけるWalshの不在—自伝と虚構の間で政治性を問う

田多良俊樹

ジョイスの大学の同窓をモデルにした人物が数多く登場する『肖像』において、なぜ Louis Joseph Walsh (1880-1940) は登場しないのか。もちろん、作家は、「自伝的」小説においても、自らの人生を余すことなく作品化するわけではなく、盛り込むべき出来事を取捨選択するのが実情だろう。

それでは、ウォルシュとの関係は作品化するに値しない些細な出来事だったのか。いや、ジョイスを退けて歴史文学協会の会計係となり、同協会の弁論大会でジョイスを破って金メダルを獲得し、同協会で読まれたジョイスのマンガ論を猛烈に批判したウォルシュは、ジョイスの大学生活に一定のインパクトを残したはずである。実際、ウォルシュは、『肖像』の原テキストである『スティーヴン・ヒーロー』には少年雄弁家ヒューズとして登場し、『肖像』の後日譚たる『ユリシーズ』では実名ではっきりと言及されている。しかし、それにもかかわらず、ウォルシュは『肖像』には不在なのである。

本報告では、このようなウォルシュの不在の意義を問う。特に、アイルランド大飢饉や民族主義の表象に注目し、ウォルシュという「自伝」的要素を排除することが、『肖像』という「虚構」が帯びる政治性といかに係わっているのかを検討する。

事実と虚構の間に生じる時間軸のずれ

田中恵理

スティーヴンの物語における時間軸とジョイスが生きた時間軸との間にずれがあるのはよく知られている。事実の中に多くの虚構が組み込まれた『肖像』は、スタニスロースが述べるように、「自伝ではなく、芸術的創作」だからである。そのため、『肖像』における事実と虚構の時間のずれの問題について、包括的に検討されることは、それほど多くはなかった。特にスティーヴンの時間の流れは、出来事を時系列で追うと矛盾が多く、未確定のままである。しかしながら、ジョイスは、伝記的な時間軸に虚構の時間を交えることによって、いったい何を語ろうとしているのかを探ることは、半自伝的小説と称される『肖像』を解釈する上で重要な鍵となっている。スティーヴンの時間軸に矛盾が多いという点もジョイスの意図がそこに隠されていると考えられる。本発表では、スティーヴンとジョイスの時間軸を比較し、そこにあるずれが、何に起因しているのか、どのような意義があるのかを探る。この問題については、日本英文学会中国四国支部第68回大会においても触れたが、今回はその内容に新たな見解を加える。事実と虚構の間に生じる時間のずれを詳細に見てゆくことによって、『肖像』の再読を試みる。

自伝的小説とは何か—『肖像』における「告白」について

道木一弘

ナラトロジーの観点から自伝と自伝的小説を比べた場合、その境界は曖昧である。ある人物が、記憶を頼りに自らの半生を語りによって再構成するという点は両者に共通しているからである。違いは、前者においては、語り手は語られる人物自身であり（一人称の語り手）、かつそれは作者と同一視されるのに対して、後者においては、語り手は語られる人物とは別人でもよく（三人称の語り手）、かつ両者は作者と同一視される必要はない。また語りの構成原理としては、自伝は一般的に時系列にそった語りを重視するが、自伝的小説においては、必ずしもそうではなく、何か別の原理が導入されると思われる（例えば、因果関係や象徴性）。

こうした言わば形態的あるいは構造的な観点から、『肖像』の自伝的小説としての特徴はある程度説明できるように思われるが、それを踏まえた上で、本シンポジウムでは「告白」という自伝特有（と思われる）の機能から『肖像』を考察してみたい。その過程で、自伝と自伝的小説の関係性に新たな視点を提示できないかと考えている。

(4) 第28回研究大会日程・大会会場・懇親会会場

大会の会場は法政大学・市ヶ谷キャンパスの 外濠校舎の「S406」となります。また大会終了後には懇親会が行われます。会場は法政大学市ヶ谷キャンパス内にある55年館の2階「教職員食堂」となります。下記地図をご参照下さい。懇親会費はドリンク込みで3500円です。事前にお振込みください。多くの方々のご参加をお待ちしております。

日程：2016年6月11日（土）

会場：法政大学・市ヶ谷キャンパス S406（外濠校舎）

懇親会会場：教職員食堂（55年館）



*会場までのアクセス

18	東京駅	JR中央線快速 約4分	御茶ノ水駅	JR総武線 約4分	飯田橋駅	徒歩 約10分	市ヶ谷キャンパス
20	新宿駅	JR総武線 約10分			市ヶ谷駅	徒歩 約10分	
20	池袋駅	地下鉄有楽町線 約10分			飯田橋駅	徒歩 約10分	
19	渋谷駅	地下鉄半蔵門線 約6分	永田町駅	地下鉄有楽町線 約3分	市ヶ谷駅	徒歩 約10分	
20	上野駅	JR山手線 約4分	秋葉原駅	JR総武線 約6分	飯田橋駅	徒歩 約10分	

内の数字は、総所要時間(乗り換え時間を除く)を表す。

2. ダブリン便り (平繁佳織)

2016年3月27日、復活祭日曜日。オコンネル通りの中央郵便局前において、国を挙げての復活祭蜂起100周年記念式典が執り行われた。要人や招待客が参列する前で、郵便局の国旗が半旗に下げられ、軍の大佐により100年前と同じその場所で独立宣言文が読まれると、自然な拍手が沸き起こった。1分間の黙とうの後に国旗が最上位に戻されると、参列者が国歌斉唱する上空でオレンジ・白・緑の着色煙を伴った曲技飛行が行われ、この日一番の歓声が上がった。

一説によると、今年「1916」を冠した行事はアイルランド国内だけで2500も予定されている。これほどまでに数が多いと、1916年を記念(commemorate)することの意義について改めて考えさせられる。昨今の復活祭蜂起をめぐるナラティブを見てみると、これまで見過ごされてきた「一般人」、とくに女性や子どもたちの役割を見直すという傾向が目につく。たとえば、蜂起における女性の役割が軽視されてきたことは、中央郵便局前で降参するパドレイグ・ピアースの有名な写真から、看護師のエリザベス・オフアレルの姿が消されていたというエピソードに象徴されるが、RTÉが史上最高額の予算で制作し、今年1月に放送されたテレビドラマ*Rebellion*は、無名の(架空の)女性3人を主人公に据えたものだった。また、今年のクリスマスに最も売れた本は、蜂起で命を落とした子どもたちを特集したジョー・ダフィーによる*Children of the Rising*である。亡くなった子どもたちは、当然ながらその存在を語り継ぐ子孫を残すことができなかったため、これまでほとんど注目されることもなかったという。

復活祭蜂起はピアースら少数が率いた英雄的な行為だとするこれまでの支配的な見方を複雑化する動きは、記念式典における追悼の祈りの中で軍所属の神父が提示した思想にも通じる。すなわち、真の自由の精神のもとに、他者への思いやり・多様性の内包を重視した、アイルランドの「新しい歌」を歌っていくべきだという思想である。2016年に生きる私たちは、100年前に起きた凄惨な出来事を多角的な視点から捉え直し、翻って現代のアイルランドが置かれている状況を見直す必要性にせまられている。

先日、アビー劇場にて復活祭蜂起を題材にしたショーン・オケーシーの『鋤と星』を観劇したときもそのことを強く感じた。幕開き、ナイキのスニーカーとTシャツを合わせた現代風の出で立ちの少女が頼りない足取りで舞台中央に進み出ると、歌詞が書かれていると思しき紙を見ながらアイルランド語で国歌を歌い始めた。少女が激しく咳き込み紙の上に真っ赤な血を吐くまで、私は彼女が肺病に侵されたモルサーだと気づけなかった。それは、この斬新な演出に加え、少女がいわゆる「白人」ではなかったからである。劇中、特別注目されることもなく結核で静かに死んでいくモルサー役に、ウルドゥー語系の名前を持つ役者を起用しアイルランド国歌を歌わせた背景には、移民問題が深刻化しているヨーロッパにおいて、一国に属するということがどういうことか、アイルランド人であるとは何を意味するのかを観客に問う意図があるだろう。

このように、『鋤と星』は100年前の政治的・社会的問題といった「陰」のテーマを現代にも痛烈に浮かび上がらせる一方で、アイルランドのもつ「陽」の側面、すなわち歌が効果的に使われることでも知られる。劇中では役者がマイクを客席に向けて合唱を促す演出があり、大いに盛り上がった(ジョイスの「死者たち」の食卓で歌われる“*For He's a Jolly Good Fellow*”もそのひとつである)。ノリのよいアイルランド人が大声で参加するようすを目の当たりにし、この国では歌によるcommemorationが大きな力を持ち得ることを身をもって感じた。復活祭日曜日の夜は、1000人を超える合唱団とRTÉ交響楽団により、詩人のポール・マルドゥーンが詞をつけた*One Hundred Years a Nation*が初演され大きな話題を呼んだ。また、上述の式典パレードでは“*Down by the Sally Gardens,*” “*Danny Boy,*” “*The Dawning of the Day,*” “*Minstrel Boy,*” “*When You and I Were Young*”など多くの民謡が演奏され、観衆が自然に口ずさむようすが見られたが、そのほとんどが100年前にも好まれて歌われていたものである。仮にジョイスがまだ生きていて記念式典を見たとして、演奏された曲のほとんどを彼は知っていただろう。1世紀の時を経ても、このような国民的行事で用いられる曲のレパートリーが変わっていないのは驚くべきことであり、また100年前の文化復興運動が現在に残したインパクトを物語っている。

皮肉にも、復活祭蜂起は1916年当時よりも100年後の今日の方が脚光を浴びているように思われる。人びとが関心を寄せていることは歓迎されるべきだが、単純なお祭り騒ぎに終始しないことが肝要である。500人近くの死者を出したこの歴史的な出来事が、現在に都合よいかたちで解釈されることのないよう、蜂起を当時の歴史的な文脈においてより精緻に読み解く作業が、現代の歴史・文学・文化批評家にはますます求められている。

2016年3月

平繁佳織 (University College Dublin)

3. 協会ホームページのリニューアルについて

この度、2016年2月にジョイス協会のホームページをリニューアル致しました。但しドメイン取得の関係上、現在は暫定的に<http://joycesocietyjapan.jimdo.com/>を使用しております。これまで使用していたjoycesocietyjapan.comのドメインについては、再取得までしばらくの時間を要します。ご迷惑をおかけしますが、協会ホームページにアクセスする際には、当面の間 <http://joycesocietyjapan.jimdo.com/>からのアクセスをお願い致します。リニューアルしたジョイス協会のホームページでは、従来の内容に加え、新たにジェイムズ・ジョイス関連書籍のページを新設し、日本で2001年以降に協会会員によって出版されたジョイス研究書籍を掲載しています。

4. 2016-17年度常任委員選挙結果について

2016年3月末日の常任委員任期満了に伴い、次年度の委員選挙が昨年11月に行われました。選挙結果にもとづく新体制については6月の研究大会の総会で発表します。ご協力有難うございました。

5. 会費・懇親会費のお振り込み

毎度のお願いとはなりますが、会費・懇親会費は、協会の口座へのお振込みをお願い致します。振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。恐れ入りますが、お振込みの手数料は会員の皆様にご負担いただいております。ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合、下記の振込先(2)となりますのでご注意ください。

1. ゆうちょ銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会
口座番号(記号) 10430
番号1854541

*振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。

2. ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会
銀行名: ゆうちょ銀行
金融機関コード: 9900 店番号: 048
預金種目: 普通
店名: ○四八店(ゼロヨンハチ店)
口座番号: 0185454